『神の慰めの書』における
マイスター・エックハルトのグリーフケア

中　川　憲　次

Grief caring of Meister Eckhart in the book of divine consolation

Kenji Nakagawa

はじめに

われわれは2005年３月発行の福岡女学院大学大学院紀要において、マイスター・エックハルトの著作『神の慰めの書』をカウンセリングの視点から論じる論文を書いた(註1)。その折は、ボエーティウス著『哲学の慰め』との関係で論じたが、今回は、マイスター・エックハルトが、夫を失って悲しんでいるハンガリーの王女アグネスを慰めるべく書いたとされる『神の慰めの書』を、グリーフケアの観点からもう一度読みなおしてみたい。その際われわれは、1997年に神戸市須磨区で起きた小学生連続殺傷事件、いわゆる「神戸少年事件」で犠牲となった山下彩花さん（当時十歳）の母である京子さんの著書『彩花がおしえてくれた幸福』(註2)を対話の相手としたい。なお、この書物に対するわれわれの関心を呼び覚ましたのは、去年の11月に聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催で行われた「死生学研究会」における高橋克樹氏の研究発表「グリーフ（悲嘆）ケアにおいて、物語ることの意味」である(註3)。よって、この高橋氏の発表内容もまた、自ずから対話の相手となる。

1　高橋氏の研究発表をめぐって

高橋氏は「喪失の悲しみを物語ることがスピリチュアルな視点を生み出す」と題した第１章の第１項を「山下京子さんによる喪失の認識転換」と題して始めておられる。この項の高橋氏の主張は、レジュメ冒頭の次の一文に明らかである。曰く、

「『彩花がおしえてくれた幸福』という本を書いた山下京子さんは執筆という営みを通して喪失の悲しみに向き合い、その悲嘆を物語ることを通してやがてスピリチュアリティに覚醒し、やがて生きる意味を見出すに至った。」

高橋氏はスピリチュアリティに覚醒することをよほど高く評価しておられるのか、続く段落でも次のように書いておられる。

「事件後の京子さんは2000年に乳癌が発見され、摘出手術をしている。娘を失い、その後乳癌を発病し、人間として多くのものを喪いつつ、なおそこに幸福（しあわせ）があるという認識を抱くに至った。特にこの手記が他の犯罪被害者の方々のものとことなるのは、京子さんがスピリチュアリティに覚醒しているからである。」

このように高橋氏は「京子さんのスピリチュアリティに覚醒」を特に高く評価しておられるが、その覚醒の内容については第１項の論述からは明確に伝わっては来ない。それは第２項で明らかにされるのである。「喪失の事実の認識が変化していくなかで、喪失や悲嘆の解釈が変わる」と題された第１章第２項で高橋氏曰く、

「さらには、京子さんは彩花さんの命を奪った少年Ａも彩花さんの人生にとっては一人の『脇役』でしかないという境地に至る。人に命を奪われるという形で人生の幕を閉じた彩花さんでさえ、沢山の人に生きる力を与える使命を果たしたと理解するに至ったのである。これは認識の方向転換であり、実存的転換（existential shift）が生じたことを示している。これは多くの支援者たちとの出会いを通して喪失の事実をいかに認識していくか、理解していくかという営みを通して、新しい物事の解釈力が生み出されたのである。喪失や死別によって悲嘆に陥ったときに、悲嘆を生み出した『事実』を変えられないので、以前の自分に戻ることはできない。けれども、その事実を物語ることを通してどのように『認識』して行くかを模索するなかで『理解』の仕方を変えていくことができる。（中略）。また、自分の背負った苦悩が同じような苦悩を背負った多くの人を励ましていくために、自分が願ったものだと引き受けていく志向性を持つことができる可能性がもたらされ、他者や社会に対して開かれた新しいパーソナリティを確立する新しい生き方へと歩みだしたことになる。そのようなスピリチュアリティに満ちた生き方に覚醒するならば、悲嘆を背負っていたとしても自分の人生に意味と目的と価値が与えられたことになる。このように辛い喪失体験が自分の果たすべき使命に変わっていく根源的な力が人間には備わっていることを山下京子さんの手記は教えている。」

この引用から、「自分の背負った苦悩が同じような苦

悩を背負った多くの人を励ましていくために、自分が願ったものだと引き受けていく志向性を持つ」ような生き方を、「スピリチュアリティに覚醒」した生き方だと高橋氏が理解しておられることが伺えよう。高橋氏の「スピリチュアリティ」強調の姿勢は第２章に至っていよいよ顕著になる。「喪失が従来の現実対応力としてのパーソナリティの見直しを迫る」と題された第２章の冒頭に曰く、

「『グリーフケアにおいて、物語ることの意味』を考えるにあたっての大きな前提は、その悲嘆に対してスピリチュアルな領域を意識しながら援助していくという点である。」

そして、われわれには決定的と思われる言葉が第２章第３段落にある。高橋氏曰く、

「スピリチュアルケアの実践の一つの方法論として『自己存在の枠組み』を変革させていくものとして『自己物語化』によるスピリチュアルケアの視点から喪失を物語ることが重要である。スピリチュアルな視点を持つ援助者が傾聴と支持、共感を通してケア対象者が語る苦難や苦痛の出来事に耳を傾け、本人が援助者とともにその困難や苦痛に向き合って自己を物語る中で獲得されるものが新しい自己像であり、自己理解である。」

「ケア対象者」が「新しい自己像」や「(新しい) 自己理解」を「獲得」することこそ、グリーフケアの実りであることは疑いないであろう。しかしその際になぜ「援助者」に「スピリチュアルな視点を持つ」ことが自明的に前提されるのであろうか。ここまで高橋氏の言葉を引用する中で、自明的に繰り返し語られた「スピリチュアリティ」、あるいは「スピリチュアル」という言葉に、われわれは当惑せざるを得ない。なぜ、高橋氏は、たとえば「スピリチュアリティに覚醒」した生き方を称揚されるのであろうか。ケア対象者は、端的に「新しい自己」を獲得すればよいのであって、「スピリチュアル」であるかどうかは問題ではないのである。高橋氏の自明的な「スピリチュアル」という言葉の多用から、われわれは「スピリチュアル」幻想とでもいうべきものを感じざるを得ない。

それでは、われわれはここから山下京子さんの手記そのものを読むことを通して、彼女がどのように自身の「グリーフ」を「ケア」されていったのかを辿ってみたい。

2　山下京子著『彩花がおしえてくれた幸福』を読む

この書物を読んで目に付くのは、他者との出会いについて丁寧に物語られている点である。以下に頁を追って引用してみたい。まず「彩花桜」と題された最初の章から。

「彩花の母校だった神戸市立竜が台小学校の正門を入った真正面に、青々と葉を茂らせた一本の桜が、風に吹かれたて悠々とたたずんでいます。まだ小さく細いその桜の幹には、パステルピンクのプレートがついていて、(ずっとそばにいるよ　姿は見えなくても　彩花　平成15年４月) という言葉が刻まれています。」(註4)

これで、この章が「彩花桜」と題された意味は分かるであろう。この文章の少し後に次のような言葉がある。

「彩花が小学校４年生——そう、人生の最後を謳歌した年に、私は保護者会の役員になりました。(略)。親が学校に関わることで、子どもが喜んでくれるのならと頑張れました。(略)。親同士の友好の輪が広がったことは嬉しいことでした。(略)。子どもを通じて手にすることのできた、すばらしい友人たちでした。彩花が亡くなったときも、彼女たちは陰になり日なたになって、私を支えてくれました。毎年、３月23日の命日がめぐってくると、今も必ず、彼女たちはわが家に集まってくれています。」(註5)

この保護者会の仲間が件の彩花桜を植えることを提案してくれたのである。この章の末尾近くに曰く、

「事件から６年も経って、しかも当時の同級生や保護者の方たち、先生方までもがワイワイと集まって、学校側のご配慮で正門の真正面に彩花桜が植樹されたのでした。」(註6)

次に「仕事」と題された章に曰く、

「97年５月８日、事件からまだ一ヵ月半しか経っていない時期に、私は職場に復帰しました。みんなは、何もいわず私を迎え入れてくれました。ある人は黙って手を握ってくれ、ある人は肩をポンポンと叩いてくれました。涙をためた相手の顔を見た途端、私はこらえきれずに泣きました。『山下さんの気持は、けっしてわかることはできないけれど、泣きたいとき、話したいときはいつでもいってね』。(略)。私に必死で寄り添ってくれようとする意味の『山下さんの気持はけっしてわからないけど』という言葉が、私には一番ありがたいものでした。」(註7)

山下さんはこのように職場の良き同僚にも恵まれていた。そのありがたさを彼女は決して忘れてはいない。

次に、子どもを失った上に襲って来た乳癌の告知を受けたときのことを書いた「告知」と題された章に曰く、

「彩花は二度とおいしいものを味わうことすらできないのだと考えると、食事をして『おいしい』と感じることにすら罪悪感を覚えていました。そんなとき、対話者として関わってくれていたジャーナリストの東晋平さんが、『彩花ちゃんのためにも、遺された者が幸福になってみせることです。親子一体の生命なのだと確信して、楽しみたいときは楽しんだらいいじゃないですか』という言葉を投げかけてくださったのです。このさりげなくかけてくださったひとことで、私は救われました。」(註8)

ここには、先程の職場の同僚と同じような、さりげない配慮があり、それが山下さんを救ったのであろう。

次に、山下さんがアメリカのオクラホマ州タルサで開

催された「子どもを殺された親の会」の年次総会に出席した折に、ヴォランティアで通訳をされたアメリカ在住の日本人、ノブ・池野・ファリルさんとの出会いが描かれた「アメリカで学んだ『心のハグ』」と題された章から引用したい。

「しんと静まり返った会場に、小声で通訳するノブさんの日本語が漏れ響きます。周囲の人に迷惑にならないかと気後れする私にお構いなしで、ノブさんは自分が正しいと感じた通りに行動されました。休憩時間も、自然とノブさんは私に寄り添ってくれます。次第に私たちは、通訳をする側とされる側という間柄ではなく、彩花のことを通して、人生について語り合い、共感し合っていきました。(略)。ノブサン、本当にありがとうございました。あなたのような美しい『生き方』に出会えた私は幸せです。私もまた、あなたのように少しでも人に尽くせる人間になっていきますね。」(註9)

次に、「HANDOS」すなわち「阪神淡路大震災1・17希望の灯り」と称する会に入会した山下さん夫妻が出会った足立さんご夫妻について書かれている「同じ痛みを抱えて」と題された章に曰く。

「HANDOSのメンバーに、兵庫県豊岡市にお住まいの足立さんご夫妻がいます。足立さんは、あの震災で新婚だった息子さん夫妻を亡くされていました。(略)。2002年の秋、豊岡市の中学校で私は講演をさせていただきました。その日は彩花の誕生日、11月9日でした。(略)。講演当日は、ものすごい雷と霰になりました。その中を、足立さんご夫妻は中学校の体育館に来てくださいました。講演終了後、私たちは別室で初めてお会いしました。自己紹介もそこそこに、足立さんのご主人が夫の肩に手を置いた瞬間、夫は何もいわず幼い子どものように涙をポロポロこぼしました。家族以外の人の前で、夫があんなに涙を流したことはありません。互いに何もいわずとも、足立さんのてのひらから夫の肩に、深い悲しみと優しさが伝わったのだと思います。」(註10)

そして、「告知」と題された章の引用にも登場した東晋平さんが、再度登場します。「妙なる法則」と題された最後から二番目の章に曰く、

「娘が亡くなったとき、私は〈なぜこんなに小さい彩花が死んでしまうの？どうして人に殺されなければならなかったの？〉という不条理に心を占領されていました。この疑問は生涯、解けないだろうと思っていました。しかし東晋平さんと出会い、思いがけず彩花をめぐる対話が始まりました。『生と死』をどう考えていくのか。『幸福』とは何か。『宿命』とは何か。あの人生の暴風雨の中で、私たち一家が最も知りたかったことについて豊かな智慧の対話が広がっていったことは、わが家の最大の奇蹟でした。(略)。東さんは、一方的に結論を与えるようなことを避け、私の中に眠っていた智慧を目覚めさせる対話に徹してくれました。私の心に智慧が満ち溢れ、私は私自身に目覚めていきました。その智慧が、前に進むための光となりました。」(註11)

『彩花がおしえてくれた幸福』からの引用を終えるにあたって、最後に最終章「人生の先達たちと」から引用したい。

「TAEKOさんは、『山下さん、本当の励ましって、何でしょうね？』と、再び私にマイクを向けました。私は、こういいました。――事件のあと、私は絶望の淵に立っていました。自分の命を投げ出してしまいたくなるような日々が続いていました。でも、そんなとき、右に倒れたら右に、左に倒れたら左に、また前やうしろ、斜めにも、多くの人たちの手がありました。その手に支えられながら、私たち家族はこうしてきょうまで生きてくることができたのです。」

山下さんは「多くの人たちの手」に「支えられながら、私たち家族はこうしてきょうまで生きてくることができたのです」と言うのである。山下さんの「グリーフ（悲嘆）」は、まず第一に、「多くの人たちの手」によって「ケア」されたのである。

ところで、この書物は山下京子さんが著した3冊目の手記である。その最初の手記『彩花へ――「生きる力」をありがとう』という書物を書くきっかけについて山下さんは、雑誌『文藝春秋』に寄せた「ずっとそばにいるよ　姿は見えなくても」と題した一文に次のように書いておられる。

「(略) このままでは、彩花の生きた十年の歳月が世の中に絶望を広げるだけの人生で終わってしまう……。なんとかしなければという思いが募っていたある日、以前に私からお訪ねしていた一人のジャーナリストが、わが家を訪問してくださったのでした。『本を書くつもりはありませんか。ただし、被害者からの告発のようなものではなく、もっとも絶望している側から、今こそ社会に希望を発信していくのです』。その人の思いは、そのまま私の思いであり、家族の思いでもありました。そこから『彩花へ――「生きる力」をありがとう』という一冊の本が生まれました。出版してまもなく、千通を超す手紙が返ってきました。そしてそれは、哀れみや同情の手紙ではなく、『私たちこそありがとう』という娘への感謝の手紙でした。ああ、彩花の生きた時間は、これで価値あるものになった。その喜びが、今度は私たち一家を大きく蘇生させてくれたのだと思います。(略)」(註12)

この一文に登場した「一人のジャーナリスト」が東晋平氏である。この東氏こそ、山下さんが出会った中で最も重要な人であろう。この人こそが、山下さんのグリーフケアを為したのである。この東氏は、一見すると、「スピリチュアルな視点を持つ援助者」そのものであるように見える。しかし、東氏はそのような「スピリチュアリティ」を振りかざして山下さんに近づいたのではなかった。東氏のグリーフケアの実態は、「妙なる法則」と題された章からの引用にあった「東さんは、一方的に結論を与えるようなことを避け、私の中に眠っていた智慧を

目覚めさせる対話に徹してくれました」という言葉に尽きていよう。この点については、東氏との対談の中で村上直之氏が次のように述べておられる。

「今日、メディアという言葉はハード面の〈媒体〉という意味でしか使われませんが、より根源的には〈媒介者〉という意味です。従来、ジャーナリズム論とメディア論は別々に論じられてきましたが、あの本を書いた当時も今も、私の関心はこの両者をいかにトータルに捉えるかにあります。マクロな視点からは、ジャーナリズムの規範原理として、政府と国民のあいだを媒介する、自由で独立したメディエーター（媒介者）という役割があります。他方、よりミクロな面では、人間関係における媒介者の役割があります。哲学は、しばしば自己と他者という二項関係を論じてきましたが、人間のコミュニケーションの成立には媒介者という第三項が不可欠であることを忘れてきたのです。（略）。97年に神戸で起きた酒鬼薔薇事件をめぐって、東さんは亡くなった山下彩花ちゃんの遺族と対話を続け、母・山下京子さんと共に、今日まで３冊の手記を出され、社会に大きな反響と共感を呼びました。東さんはご遺族にとっても社会にとっても、まさに〈媒介者〉としてジャーナリズムの根源的な役割を果たされてきたと思います。」(註13)

正に「善き友」となることは、「メディエイター」になることであって、東氏は山下さんの「善き友」となったのである。

次に、われわれはマイスター・エックハルトのグリーフケアについて、その著『神の慰めの書』を読んでみたい。

3　マイスター・エックハルト著『神の慰めの書』を読む

この書の序において、エックハルトはまず、人を襲う３種類の艱難があるとして曰く、

「第一は、物質的な損害によるもの、第二は、自分の血縁や友人に降りかかった被害、第三は、自分自身に起きた、侮辱、不快、身体の痛み、心の悩みなどの被害である。」(註14)

続いて、このような被害や損害を受けても動じるところのない人を登場させる。それは「よい人」であり、この「よい人」について次のように言われる。

「善である限り、造られたり、創造されたものではなく、善性そのものから生まれた子供であり、息子である」(註15)

このような「よい人」は「外部の禍に襲われても、彼の心は平静で、平安で、動じない」(註16)のであるが、このような人間は今回のわれわれの問題の外にいる人間であろう。

苦しむ人を慰める30の話題と教えが述べられる第２部において、エックハルトが「神の意志」について語っている箇所がある。曰く、

「どのようなことであれ、そうなるのが神の意志である限り、よい人の意志は神の意志とまったく一つになり、合一されなければならないので、それが自分の禍でも、いや、自分が地獄に落ちようと、人は神とともに同じことを望まねばならない」(註17)。

同じく、次のようにも曰く、

「恩恵と善をもつならば、いかなる時も、どのような状況におかれても、過不足なく、完全に慰められ、満足するが、もしこれをもたなければ、私は神のために、神の意志において、それなしで済まさねばならない。私が切に求めるものを神が与える意志があるなら、私はそれを所有し、歓喜にひたるのである。もし、神が与える意志がないならば、神が与えたくないという、神の意思に従い、それを所有しないことを受けるのであり、このように、私は、受け取ることによってではなく、無しで済ますことによって受けるのである。」(註18)

以上は、正に信仰の極みとも言える境地である。そのような神と合一したとも言える境地に達した人間は、もちろん悩まないであろう。しかし、愛する者を失って悲嘆に暮れているような人に向かってそのような信仰の境地について押し付けがましく語ったところで、何のグリーフケアになろう。それでは、今回われわれが問題にしている事柄に適合するエックハルトの言葉を見てみよう。それは、正に「自分の血縁や友人に降りかかった被害」や「自分自身に起きた、侮辱、不快、身体の痛み、心の悩みなどの被害」にさいなまれている人に対するケアとなる言葉である。エックハルトは何と言っているであろうか。われわれが今回特に注目したいのは、第２部の末尾近くである。曰く、

「さらに、また次のことも考慮しなければならない。ある人が苦痛、災害に、堪え苦しむ友人を持っていると仮定すると、この人は友のもとにやって来て、彼に付添い、できる限り慰めになるもので友を慰めるのは至極当然なことであろう。それゆえ、私たちの主が詩編で、よい人について『彼と共に苦しむ』（詩編35編13節、14節）といったのである。この言葉から七つの教えと七倍の慰めとを導き出すことができるのである。」(註19)

こうして七つの教えが順次述べられるが、その第３までの教えは神と合一したとも言える境地に達した人間にのみ相応しいような教えである。曰く、

「第一は、聖アウグスティヌスによると、神のために苦しみに耐えることは、人が（他の）人からその意志に反して取り上げる全てのものよりはるかによい、より高い、より高貴なものであるという。（略）。第二は、神が共に苦しむと述べた言葉だけで、このことを推論しているのではない。（略）。もし、神が私と共に苦しむなら、これ以上に何を求めようとするのか。（略）、第三には、神が私たちと苦しまれるとは、神自ら私たちと一緒に苦しまれるという意味である。真に、真理を認識する者は、私

が真実を言っていることを知っている。人と一緒に苦しまれる神は、神のために苦しむ人より、ずっと早く、はるかに多く神にふさわしい仕方で苦しまれる。さて、私は次のように言いたい。神御自身が苦しみを望んでいるなら、私も当然苦しむべきであろう。その理由は、私が正しいなら、神が欲することは私も欲するからである。（略）」[註20]

神が自分と共に苦しんでおられると、自明的に信じることのできる者は幸いである。そのようなものには今しがた引用したエックハルトの言葉は、有効である。しかし、そうでない者は、どのようにして神が自分と共に苦しんでくださるということを理解すればよいのであろうか。しかし、このことを、エックハルトは熟知していたと思われる。それは、続く第四番目の教えを読めば分かるのである。エックハルト曰く、

「友人が共に苦しんでくれるなら、当然、この苦しみは減少する。もしわたしと一緒に苦しみをわかちあってくれる人のあわれみが私を慰めることができるなら、神のあわれみはこれよりいく倍も私を慰めるであろう」[註21]

そうであろう。人は自分の苦しみを具体的に共に分かち合って苦しんでくれる人間を通してしか、自分と共に苦しんでくれる神の存在を想像することはできないのである。ここに至って、エックハルトのグリーフケアにおいても、苦しみを共にしてくれる「人」の存在は決定的である。そのような存在があってこそ、第五番目の教えから後に続く教えも生きてくるであろう。第六番目の教えに曰く、

「私が苦しむより前に神が苦しんでいて、私も神のために苦しむとすれば、私のすべての苦しみは、どんなに大きく、どんなに多様であろうと、慰め、喜びに変わることは容易なことである。」[註22]

更に第七番目の教えに曰く、

「よい人が神のために苦しむことはみな神のうちで苦しむことである。神は彼が苦しむとき彼とともに苦しむのである。私の苦しみが神のうちにあり、神がともに苦しむのならば（Ist min liden in gote und mitlidet got,）、苦しみが苦痛を失い、私の苦悩は神のうちにあり、私の苦悩は神であるとき、どうして苦しみは私にとって苦悩だと言えようか。」[註23]

こうして七つの教えが述べられた後、エックハルトは確信に満ちて命じている。曰く、

「これほど多い益があり、恵みがあるのだから、このように神のために苦しみなさい」[註24]。

エックハルトは「苦しみなさい」と言う。しかし、見逃してはならない。エックハルトは、今しがた引用した第四番目の教えにあったように、共に苦しんでくれる人の存在を前提しているのである。あるいは、エックハルトは共に苦しむ者の存在の決定的な重要性を前提しつつ、究極的な友である神の存在を指し示しているともいえよう。

結　び

われわれは娘の彩花さんを理不尽にも殺された山下京子さんの悲嘆（グリーフ）が、苦しみを共に分かち合ってくれた大勢の人々によってケアされたことを初めに見た。そこでは特に東晋平氏というメディエイター（媒介者）が大きな働きを為していた。それは、最終的には高橋克樹氏のいわゆる「スピリチュアリティの覚醒」という境地へと山下京子さんを導いたかもしれないが、山下さんの苦しみを分かち持とうとされた大勢の方々や東氏は、まずは端的に山下さんの苦しみに心を寄り添わされたにすぎなかろう。どうすれば、そのはかりがたき山下京子さんの苦しみを理解できるかということにのみ心を砕かれたのであって、スピリチュアルな境地に導いてやろうなどということには、何ら腐心することはなかったに違いない。

エックハルトが『神の慰めの書』で言っているところも、山下京子さんが受けたグリーフケアとよく響きあっていると言えよう。エックハルトは神秘主義の巨匠の本領を発揮して神が共に苦しんで下さるということをよく理解せよと、一見、頭ごなしに命じているようであったが、その実、「友人が共に苦しんでくれるなら、当然、この苦しみは減少する」という単純な真理を充分に踏まえていたのである。そのような共に苦しんでくれる人があってこそ、人はいわゆる「霊的な」境地に進むことができるのである。こうして、『神の慰めの書』におけるマイスター・エックハルトのグリーフケアは、「苦しむ者と共に苦しむ」ということに集約されるであろう。

最後に、村上直之氏の「東さんはご遺族にとっても社会にとっても、まさに〈媒介者〉としてジャーナリズムの根源的な役割を果たされてきたと思います」という言葉に示唆を受けて説教者エックハルトが1300年代初頭のラインラントで果たした役割について思いを致してみたい。エックハルトは正にメディエーターであったと言えよう。彼は苦しめる者に心を寄り添わせ、その代弁を説教でしていたと思われる。「苦しむ者と共に苦しむ」という『神の慰めの書』のモチーフは、エックハルトの説教活動を一貫して貫いていたと言えよう。その姿勢は、唐突に思われるかもしれないが、ナチス華やかなりし1941年8月3日に、ナチスのＴ４作戦（ナチス・ドイツのいわゆる「優生思想」に基づいた、障害者や難病の患者の「安楽死計画」のこと）に明白に抗した説教を為した、ミュンスター大司教グラフ・フォン・ガーレン司教にも見られる。曰く、

「（略）非生産的な同胞を殺す権利を人間が持ち、それを今、まず最初に哀れな抵抗できない精神病患者に適用することが一旦認められれば、原則的に、あらゆる非生産的な人、それゆえ不治の病人、働けない身体障害者、労働や戦争による廃疾者に対する殺害は、われわれが老いさらばえて非生産的になった日のわれわれすべてに対

する殺害は野放しになります。そうなれば、何らかの秘密の命令は精神病患者で試験済みの方法を、他の『非生産的な人々』にも適用せよと命じるだけでいいのです。そうなれば、われわれの誰も自分の命がおぼつかなくなります。何らかの委員会がわれわれの誰かを、その判断によれば生きる価値がなくなった非生産的な人々のリストに載せるかもしれません。それに対し、警察はその人を保護しないでしょうし、裁判所はその人の殺害を罰して殺害者を当然の処罰に委ねることをしないでしょう。そうなれば、この先誰が自分の医師を信頼できるでしょうか。医師は患者を非生産的であると届け出て、その患者を殺せという指令を受けるかもしれないのです。もしこの恐るべき教説が許され、受け入れられ、守られるなら、いかなる道徳の荒廃が、世間一般のいかなる相互不信が家庭の中にまで持ち込まれるか、想像もできません。（略）」(註24)

ここには、ナチスの安楽死作戦によって殺されつつある「非生産的な人間」という烙印を押された人々の苦しみを「共に苦しむ」ガーレン司教の思いがありありとしている。説教がメディアの本来の意味を獲得した好例であろう。

註

1 「『神の慰めの書』におけるマイスター・エックハルトのカウンセリング　―ボエーティウスの『哲学の慰め』との比較において―」福岡女学院大学大学院紀要第２号、2005年３月、29頁－34頁。
2 山下京子著『彩花がおしえてくれた幸福』、ポプラ社、2003年。
3 高橋克樹氏（豊島岡教会牧師・日本聖書神学校総務部長）「グリーフ（悲嘆）ケアにおいて、物語ることの意味――スピリチュアルな視点からの援助――」（研究発表レジュメ）（2006年11月４日（土）　於さいたま新都心　産学交流プラザ《彩の国８番館》２階10号　聖学院教室）。
4 山下京子、前掲書、10頁
5 同書、11－12頁。
6 同書、18頁。
7 同書、37－38頁。
8 同書、47－48頁。
9 同書、79－82頁。
10 同書、96－98頁。
11 同書、144－145頁。
12 『文藝春秋』（文藝春秋刊）2004年４月特別号所収。
13 「対談『媒介者』としてのメディアの意味。『憎しみの連鎖』が巻き起こる世界の中、メディアの真のあり方を問う。　神戸女学院大学文学部総合文化学科教授　村上直之　フリー・ジャーナリスト　東晋平」（『潮』2005年７月号所収）
14 原典は以下の如し。Meister Eckhart: Die Deutschen Werke. Band 5. Deutschen und lateinischen Werke, W. Kohlhammer Verlag, 1987.　訳文は以下の書物を参考にした。マイスター．エックハルト著、植田兼義訳『キリスト教神秘主義著作集６』、教文館、1989年、329頁。
15 同上、330頁。
16 同上、333頁。
17 同上、338頁。
18 同上、340頁。
19 同上、360頁。
20 同上、360－361頁。
21 同上、362頁。
22 同上、362頁。
23 同上、363頁。
23 同上、364頁。
24 ペーター・シュタインバッハ、ヨハネス・トゥヘル編、田村光彰他訳『ドイツにおけるナチスへの抵抗1933－1945』、現代書館、1998年、第３章「キリスト者の抵抗」所収。